

「共生とは何か」～水立国日本の理念～

2008年11月14日 開催

「共生」は疑いのない大きな理念として語られています。しかし、そこで考えることをやめてしまうわけにはいきません。「共に水を守っていこう」という思想の背景には、多様な水利用の現場で「それぞれの共生の理念」があるはずです。私たちはそのような理念をどうすればつくれるのか。さらに、日本は水との共生のためにどのような貢献できるのか。こうした意図の下、報告とディスカッションを行ないました。

【問題提起】

「水循環における共生」～これからの正念場?!～

沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授

【報告】

「川は何と共生してきたのか」

島谷幸宏 九州大学大学院工学研究科教授

「自然と共生するために必要な社会の論理と倫理」

倉阪秀史 千葉大学法経学部総合政策学科教授

「水の越境紛争から共生のメカニズムを探る」

中山幹康 東京大学大学院新領域創成科学研究科教授

【パネルディスカッション】

「水との共生のために日本が貢献できること」

コーディネーター：沖 大幹 登壇者：上記報告者



問題提起・報告

問題提起の口火を切ったのは沖大幹さん。我々が共生というとき、それは、自然の恵みを人間が一方通行で受け続けたいと思っていることではないか。逆に人間が自然に貢献するというのは有り得ないのではないか。そうした前提で、多くの人が「都市にも、豊かな水辺環境がほしい」と思う一方、治水も考えねばならず、自然と人工物との関係も考えていかねばならない。これが共生の問題なのではないかと指摘した。

河川生態工学者として全国の水辺を歩いている島谷幸宏さんは、水田を例に、水害と稲作という、リスクと恵みのバランスをどうとるのが問題という。そして、「アトム型国家」「トトロ型国家」という言葉で、若い人たちが自然再生が重要な鍵であることに気づいていることを指摘し、豊富な現場写真をもとに、自然のコミュニティ管理も含めて解説した。

倉阪秀史さんはエコロジカル経済学の考え方を説明し、少ない環境負荷でより多くの経済的付加価値を生み出す経済発展が選ばれるように経済のルールを変えていかななくてはならないという。それは脱物質化、脱有害物質化、脱炭素化となるが、これを導く政策としては、無駄を省くこと、製品の長寿命化、小水力発電のような分散的資源のローカル活用が重要であると述べた。

国際河川紛争を研究している中山幹康さんは、国際流域が世界の半分を占めていると指摘し、国家間での水紛争、水折衝のケースをいくつか

紹介した。そしてナイル川、ヨルダン川、チグリス・ユーフラテス川のような乾燥地の場合、リアリストなゲームが通用するが、モンステリアアジアのメコン川やガンジス川などでは渇水・洪水問題が加わるために、異なる展開を示すことがあることに言及。日本はそういう領域で世界に貢献できるのではないかと指摘した。

ディスカッション

コーディネーターは沖大幹さん。ともすると拡散しやすい「共生」というテーマについて、討議を行なった。詳細については、当センターホームページでご覧いただくとして、最後に沖さんのまとめの言葉を紹介しておこう。

「人の幸せのために、心豊かに自然を感じられるようにする。それは我々人類のためにもなりますが、そのこと自体が自然と共生するという意味だ。」

アンケートに寄せられたコメント

討論は、先生方の頭の中がのぞけたようで、おもしろかったです。水と共生、人と人の共生、経済と水との共生など、いろいろなテーマがあって、新しい視点をもらいました。

国際河川の話聞いて、「日本は島国だから」という考え方が変わったときが良かったです。

基本的に共生はありえないと思う。4名の分野・考え方に違いがあり、面白い話が聞けた。

水との共生を考えると、日本の持つ技術 文化の役割を認識した。



■水の文化32号予告

特集「治水」(仮)

川の歴史の半分は

「治水」の歴史と呼べるかもしれません。

現在の治水、治水家の果たした役割、治水の遺産。

治水の文化は

意外な多様性に満ちています。



水の文化

Information

『水の文化』に関する情報をお寄せください

本誌『水の文化』では、今後も引き続き「人と水とのかかわり」に焦点を当てた活動や調査・研究などを紹介していきます。

ユニークな水の文化楽習活動や、「水の文化」にかかわる地域に根差した調査や研究などの情報がありましたら、自薦・他薦を問いませんので、事務局まで情報をお寄せください。

ホームページのお問い合わせ欄をご利用ください

<http://www.mizu.gr.jp/>

水の文化 バックナンバーをホームページで

本誌はホームページにてバックナンバーを提供しています。

すべてダウンロードできますので、いろいろな活動にご活用ください。

水の文化人ネットワーク 春の登壇者

当センターホームページ・水の文化「人」ネットワークコーナー。

以下の方をアップロードする予定です。

中川 功 拓殖大学政経学部教授

編集後記

◆ 昔の暮らしの「水」は屋外で、家の中で水が使えるようになったことは、劇的な環境変化であったはずだ。快適なあまり水まわりの技術はどんどん高度化したのだが、暮らしのデザインは忘れられがちだ。水まわりの自由度がもつと認知されれば、新しい暮らしのデザインも生まれるかも知れない。(新)

◆ 幅30cmの流し台にコンロは一口。友人の所のキッチンはそのような感じらしい。それよりはマシだが、うちも似たようなもの。料理を作る気にならないのはキッチンのせい；というのはいしい訳か。理想の生活から、今の間取りは微妙にズレている。家を作る・部屋を探す時には、そこでどう暮らしたいか？ という視点が大切だと改めて思った。(百)

◆ 子供の頃の築30年の家の記憶が甦った。冬の湯沸器のお湯のありがたかったこと！お風呂は広く、大きな窓から庭が見えた。水まわりのこだわりがあると思えば窓付きのお風呂今風に言うならビュバスか。キッチンより風呂。オヤジ現象もここまで来たか。(ゆ)

◆ 私の水まわりは「空白の日常」だ。何も不満がない。災害に遭遇したり、身体が不自由になったり、水道のない所で自然を相手に食べていかななくてはならないとき。そのとき、真剣に水回りを考えるんだろうな。(中)

◆ 海外では、高級ホテルであっても、トイレ・バス・洗面所が一体となった「3点ユニット」が珍しくないらしいが、多くの日本人にとって「バス・トイレ別」は譲れない間取り条件である。我々の水まわりへのこだわり、侮るなかれ。(緒)

◆ 普段定められた条件で何気なく使っている水まわり。考えてみれば他の居住空間は家具などで後々でもスタイルを決められる。むしろそれらはアバウトでも、一度決めたら容易に変更できない水まわりこそ、真剣に考えただわってみたいのではないだろうか。(力)

◆ 「生きる工夫」というフレーズが、我が家で流行っている。それを具現化して水まわりに落とし込んだのが、我が家流の水まわりだ。流し台はタイルを貼った手づくりの特大大サイズ。もちろん、床は土間だ。汎用の大根は川で、雑巾バケツは外川端で洗うから、屋外にも進出中である。(賀)

ミツカン水の文化センター機関誌

水の文化

第31号

ホームページアドレス
<http://www.mizu.gr.jp/>

禁無断転載複写

発行日 2009年(平成21年)2月

企画協力 沖 大幹 東京大学生産技術研究所教授
古賀邦雄 水・河川・湖沼関係文献研究会
陣内秀信 法政大学教授
鳥越皓之 早稲田大学教授

編集制作 新美敏之 百瀬友美 小林夕夏 中庭光彦
緒方大輔 賀川一枝 中野公力 賀川督明

発行 ミツカン水の文化センター

〒104-0033 東京都中央区新川1-22-15 茅場町中笠ビル9F
株式会社ミツカングループ本社 社会・文化活動センター内
Tel. 03(3555)2607 Fax. 03(3297)8578

お問い合わせ

ミツカン水の文化センター 事務局
〒104-0043 東京都中央区湊1-13-2 アリス・マナーガーデン11F
Tel. 03(3552)7504 Fax. 03(3552)7506